富山県 つるぎ山麓トレイルdu上市

マラニックからレースへステップアップしたのは地元とともに歩むため

大会実行委員長
東条叙宏さん
INTERVIEW

2021年、富山県中新川郡上市町でスタートした上市マラニック大会は、誰でも気軽に参加できる大会として回を重ねるごとに規模を拡大していた。

「プレ大会含めて4回やって、昨年は参加者500人までの規模に成長しました。ただ、自分の中では頭打ちというか、県外の参加者が思った以上に増えなかったんです。マラニックという言葉を使った理由は、富山県ではトレイルランという言葉がまだ浸透していないので、誰でも気軽に参加できるようにと考えて。でも、県外に対してはマラニックという言葉が響かなかったのでしょう。あと、マラニックもトレイルランもやっていることは同じですが、マラニックは少しゆるい感じがあって、マラソンの延長で何も持たず、マラソンシューズで参加する方が多く、それに対して危機感があったのもマラニックを卒業する理由のひとつでした」

そう説明してくれたのは、10年前に東京から上市町に移住して富山ランニングクラブを設立した東条叙宏（のぶひろ）さん。元陸上部の経験を活かした仕事だった。

「集まってくれた人たちを楽しませたいなというところから毎週末にイベントを企画して、じゃあ上市町の山を使って何かできないか

と考え、上市マラニック大会が生まれました。実はその頃、私自身もマラソントレーニングの一環で山を走っていましたが、それがトレイルランと呼ばれると知ったのは3年前でした。きっかけは石川県で開催されているヤリカン12時間耐久&100マイルに誘われて出たこと。いきなり100マイルで優勝して、トレイルランの楽しさにハマりました」

上市マラニックという名前から、「第1回つるぎ山麓トレイルdu上市大会」に変更した理由は県外集客への思いが強かった。

「マラニックの時は99%が県内、1%が石川県からの参加でした。県外からの参加を増やすため、名前も変え、トレイル率も増やしました。結果、第2回上市マラニックの時の参加者が500人だったのに対して、第1回つるぎ山麓トレイルには882人がエントリーしてくれました。しかも、県外からの参加は4割にも増えました。

トレイル率は6割。北陸エリアはマラソンの延長線で出る人が多いので、入りやすくするためにロード比率はやや多め、累積標高もやや抑えめな設定です。ショートコースが24kmで累積標高610m、ロングは44・5kmで、累積標高は1500m。エイドは5kmごとに設置しました」

最初はどこも否定的

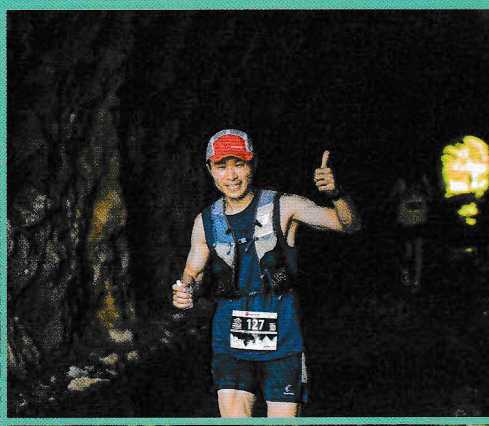
マラニックからトレイルランレースに進化する上で、最も苦労したのは地元の人たちとの調整だったという。

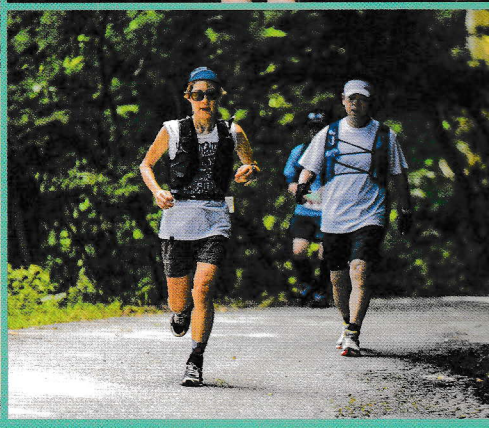
「上市マラニックでの一番の失敗は、地元の協力が得られなかったこと。役場の協力は得られていましたが、マラニックの頃は住民説明会もやらず、『迷惑かけませんからやらせてください』というスタンスだったんです。そうして回を重ねて、大会動画をYouTubeで見返してみた時、身内だけで盛り上がっているレースだというのに気づいたんです。

第1回つるぎ山麓トレイルdu上市大会としてやるにあたって、まずは地元の方々の協力を得ることを最優先に動き出しました。上市町にはたくさん地区があり、コースに隣接する4地区については住民説明会を2〜3カ月前から行なって、ていねいに説明させてもらいました。でも、最初は厳しかったですよ（苦笑）。

エイドとなった旧白萩南部小学校のある種地区は60人ほどの集落で、最初の住民説明会で参加してくれたのは5〜6人でした。地区会長さんも『年寄りばかりの地区で、家から出るのも億劫だという人もいる。そんなわしらに何をや

城ヶ平山の山頂に設けられたウォーターエイド。この日は天気が良く絶景が見渡せたが、気温はまさかの37℃まで上昇した。それでもエイドのおもてなしを受け、参加者たちは笑顔を絶やさなかった。





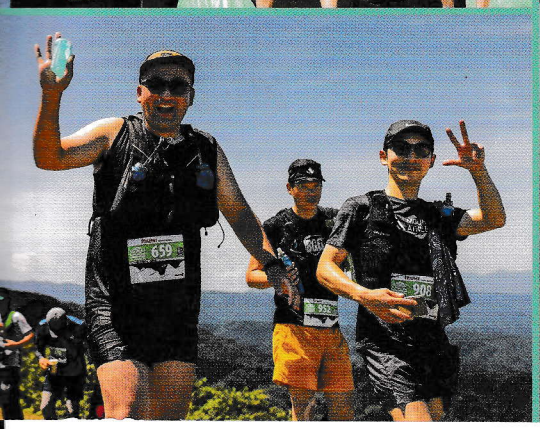
地元の人たちが歩み寄ってくれて当日は一丸となって開催できた

れって言うんだ？』と、否定的なスタンス。でも、頻繁に足を運ぶうちに協力的になってくれて、『エイドなんて見たことも聞いたこともないけど、せっかく県外からたくさん来るなら、何か振る舞おう』と言ってもらえる関係性を築くことができました」

住民説明会の参加者も最終的には30人ほどにまで増え、種汁という地元の名物を出そう、梅シロップドリンクを振る舞おうというアイデアまで住民から出るようになった。他のエリアも最初は3人だった住民説明会への参加者が徐々に増えていった。

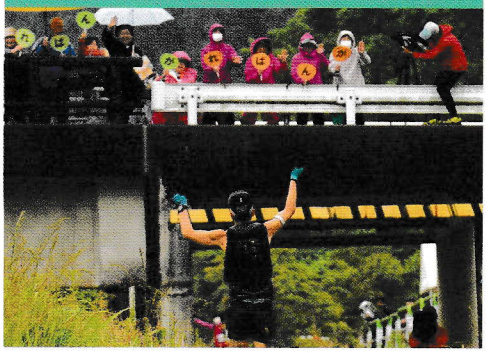
「大会当日、エイドでお手伝いしてくれる人、沿道で直前に配ったうちわを振って応援してくださる人を見て、本当に涙が出てきましたね。大会が終わった後に挨拶回りをしに行ったら、『来年もまた応援するからどんどん言ってくれ。これはもう町一丸となって盛り上げる大会だから』と言われた時は、また涙が出る思いでした。もちろん役場の方々の協力も欠かせないもので、一丸となれたことが大きかったと思います」

町が歓迎してくれたことで誰も

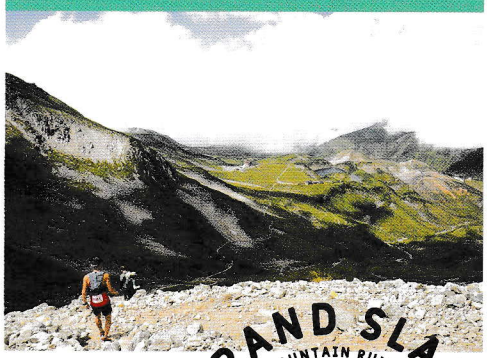


万葉の里高岡 二上山トレイルラン

あさひトレイル ZERO to ZERO



立山登山マラニック



富山4大会を対象にしたグランドスラム開催中!!

GRAND SLAM OF MOUNTAIN RUNNING Finisher
FUTAGAMIYAMA TRAILRUN
ASAHI TRAIL ZERO to ZERO
TSURUGI SANROKU TRAIL
TATEYAMA MARANIC
TOYAMA 2024

今年、富山で開催されているこのつるぎ山麓トレイルに加え、上記の二上トレイルラン、あさひトレイル、立山登山マラニックの４大会で開催されている「グランドスラム」。主催者は違うけれど、富山県で開催されるレースどうしが手をつなぐ企画は本誌としても大賛成！　４大会それぞれのロングの部を完走した人を対象にグランドスラムという称号が与えられ、記念品も贈呈予定だという。こうした企画が他県でもどんどん増えて交流が深まることを期待したい。

が幸せな気持ちになれたこの大会だが、実は大会2週間前には開催の危機があったという。

「今だから言えますが、6月半ばの試走会で大失態がありました。私は腹痛で入院していて、他の実行委員のメンバーが試走会を牽引していたのですが、地元の方に挨拶を忘れたり、集合場所の小学校を古いと言ったことが種地区の地区会長の耳に入ってしまい……。『もう場所も貸さないし、協力もしない』ということになったんです。退院後すぐにお詫びに行って、なんとかお許しいただけましたが、本当に紙一重でレースが開催できなかったかもしれません」

もうひとつ、マラニックの時からの大きな違いがある。それは実行委員のメンバーだ。マラニックの時は200人いるランニングクラブのメンバーだけで回したが、つるぎ山麓トレイルでは主要実行委員のメンバー12～13人以外は、なるべく地元の人にボランティア協力を要請した。時間はかかったが、それが地元の歓迎ムードにつながったのだ。

「地元との関係を深めて、来年は1000人規模にまで成長させたいなと思っています。北陸に心温まる良い大会があるよ、と全国のトレイルランナーから言われるような大会を目指したいです」